

1.6 [土]	第203回 土曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Saturday Matinée Series, No. 203 Saturday, 6th January, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
1.7 [日]	第203回 日曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Sunday Matinée Series, No. 203 Sunday, 7th January, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮／シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）

Principal Conductor SYLVAIN CAMBRELING P. 5

ヴァイオリン／三浦文彰 Violin FUMIAKI MIURA P. 6

コンサートマスター／小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

J. シュトラウスⅡ世 喜歌劇〈こうもり〉序曲 [約9分] P. 8

J. STRAUSS II / “Die Fledermaus” Overture

J. シュトラウスⅡ世 ワルツ〈南国のバラ〉作品388 [約7分] P. 8

J. STRAUSS II / Rosen aus dem Süden, op. 388

ラヴェル 亡き王女のためのパヴァーヌ [約6分] P. 8

RAVEL / Pavane pour une infante défunte

ヴィエニャフスキ 華麗なるポロネーズ 第1番 作品4 [約6分] P. 9

WIENIAWSKI / Polonaise brillante No. 1, op. 4

デュカス 交響詩〈魔法使いの弟子〉 [約12分] P. 9

DUKAS / L'apprenti sorcier

[休憩 Intermission]

オフエンバック 喜歌劇〈天国と地獄〉序曲 [約10分] P. 10

OFFENBACH / “Orphée aux enfers” Overture

サン＝サーンス 歌劇〈サムソンとデリラ〉から“バッカナール” [約8分] P. 10

SAINT-SAËNS / Bacchanale from “Samson et Dalila”

ワックスマン カルメン幻想曲 [約10分] P. 10

WAXMAN / Carmen Fantaisie

J. シュトラウスⅡ世 トリッチ・トラッチ・ポルカ 作品214 [約3分] P. 11

J. STRAUSS II / Tritsch Tratsch Polka, op. 214

J. シュトラウスⅡ世 ポルカ〈雷鳴と電光〉作品324 [約3分] P. 11

J. STRAUSS II / “Unter Donner und Blitz” Polka schnell, op. 324

J. シュトラウスⅡ世 ワルツ〈美しく青きドナウ〉作品314 [約9分] P. 11

J. STRAUSS II / An der schönen blauen Donau, op. 314

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団 [助成] 文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業） [事業提携] 東京芸術劇場



芸劇ジュニア・アンサンブル・アカデミー プレコンサート

1月7日(日)の《第203回 日曜マチネーシリーズ》では、開演前の13:35から、「芸劇ジュニア・アンサンブル・アカデミー」の受講生によるプレコンサートをコンサートホールで開催します。

1.13 [土]	第574回 定期演奏会 サントリーホール／18時開演 Subscription Concert, No. 574 Saturday, 13th January, 18:00 / Suntory Hall
----------	--

指揮／シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）

Principal Conductor SYLVAIN CAMBRELING P. 5

クラリネット／イェルク・ヴィトマン Clarinet JÖRG WIDMANN P. 6

コンサートマスター／崎谷直人（ゲスト） Guest Concertmaster NAOTO SAKIYA

ブリテン 歌劇〈ピーター・グライムズ〉から

“4つの海の間奏曲” [約16分] P. 12

BRITTEN / Four Sea Interludes from “Peter Grimes”

I. 夜明け：Lento e tranquillo

II. 日曜の朝：Allegro spiritoso

III. 月の光：Andante comodo e rubato

IV. 嵐：Presto con fuoco

ヴィトマン クラリネット協奏曲

〈エコー＝フラグメンテ〉（日本初演） [約20分] P. 13

WIDMANN / Clarinet Concerto “Echo-Fragmente” (Japan premiere)

[休憩 Intermission]

ブルックナー 交響曲 第6番 イ長調 作品106 [約54分] P. 14

BRUCKNER / Symphony No. 6 in A major, WAB. 106

I. Maestoso

II. Adagio : Sehr feierlich

III. Scherzo : Nicht schnell

IV. Finale : Bewegt, doch nicht zu schnell

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）

[協力] アフラック



1.19 [金]	第608回 名曲シリーズ サントリーホール／19時開演 Popular Series, No. 608 Friday, 19th January, 19:00 / Suntory Hall
1.20 [土]	第7回 パルテノン名曲シリーズ パルテノン多摩大ホール／15時開演 Parthenon Popular Series, No. 7 Saturday, 20th January, 15:00 / Parthenon Tama in Tama-center
1.21 [日]	第100回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ 横浜みなとみらいホール／14時開演 Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series, No. 100 Sunday, 21st January, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall

指揮／シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者)

Principal Conductor SYLVAIN CAMBRELING P.5

ヴァイオリン／イザベル・ファウスト Violin ISABELLE FAUST P.7

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

ブラームス ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品77 [約38分] P.16

BRAHMS / Violin Concerto in D major, op. 77

- I. Allegro non troppo
- II. Adagio
- III. Allegro giocoso, ma non troppo vivace

[休憩 Intermission]

J. S. バッハ (マーラー編) 管弦楽組曲から第2, 3, 4曲 [約12分] P.17

J. S. BACH (arr. MAHLER) / Excerpts from Orchestersuite

- II. Rondeau & Badinerie in B minor (from BWV 1067)
- III. Air in D major (from BWV 1068)
- IV. Gavotte in D major (from BWV 1068)

ベートーヴェン 交響曲 第5番 ハ短調 作品67 〈運命〉 [約31分] P.18

BEETHOVEN / Symphony No. 5 in C minor, op. 67

- I. Allegro con brio
- II. Andante con moto
- III. Allegro - IV. Allegro

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団 (1/19、21)
多摩市文化振興財団、読売日本交響楽団、読売新聞社 (1/20)

[協賛] NTTコミュニケーションズ株式会社 (1/19)

[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業) (1/19、21)
平成29年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業 (1/20)

[協力] 横浜みなとみらいホール (1/21)



Maestro of the month 今月のマエストロ

シルヴァン・カンブルラン

(常任指揮者)
Sylvain Cambreling

ニューイヤーを彩る
変幻自在のタクト



昨秋メシアンのアラベスク『アッシジの聖フランチェスコ』で大成功を収めた、われらのマエストロが早くも再来日。ニューイヤー・コンサートを手始めに6公演を指揮する。ヨハン・シュトラウスⅡ世の華やかなワルツから、ブルック

ナーの重厚な交響曲へ。変幻自在のタクトを満喫できる、充実した年明けだ。

1948年フランス・アミアン生まれ。これまでにブリュッセルのベルギー王立モネ歌劇場の音楽監督、フランクフルト歌劇場の音楽総監督、バーデンバーデン & フライブルク SWR (南西ドイツ放送) 響の首席指揮者を歴任し、現在はシュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督とクラウン・フォーラム・ウィーンの首席客演指揮者を兼任する。また、巨匠セルジュ・チェリビダッケの後任として、ドイツ・マイントのヨハネス・ゲーテンベルク大学で指揮科の招聘教授も務める。

客演指揮者としてはウィーン・フィル、ベルリン・フィルをはじめとする欧米の一流楽団と共演しており、オペラ指揮者としてもザルツブルク音楽祭、メトロポリタン・オペラ、パリ・オペラ座などに数多く出演している。

録音にも積極的で、読響とは「幻想交響曲ほか」「ペトルーシュカほか」「第九」「春の祭典／中国の不思議な役人」「スコットランドほか」をリリースしている。

- ◇ 1月6日 土曜マチネーシリーズ
- ◇ 1月7日 日曜マチネーシリーズ
- ◇ 1月13日 定期演奏会
- ◇ 1月19日 名曲シリーズ
- ◇ 1月20日 パルテノン名曲シリーズ
- ◇ 1月21日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ



©Yuji Hori

ヴァイオリン 三浦文彰

Violin Fumiaki Miura

2009年世界最難関とも言われるハノーファー国際コンクールにおいて、史上最年少の16歳で優勝。以降、国内外で活動を展開。14年はルーヴルでパリ・デビュー。17年にはロンドンでリサイタル・デビューを果たし、チャイコフスキー・シンフォニー・オーケストラとの日本ツアーも行う。18年は、ロイヤル・フィルとロンドンで共演、ロイヤル・リヴァプール・フィルとの日本ツアーを予定している。16年NHK「真田丸」テーマ曲の演奏も話題に。使用楽器は、宗次コレクションより貸与されたストラディヴァリウス“Viotti”(1704年製)。

◇ 1月6日 土曜マチネーシリーズ
◇ 1月7日 日曜マチネーシリーズ



©Marco Borggreve

クラリネット イェルク・ヴィトマン

Clarinet Jörg Widmann

作曲家、クラリネット奏者として幅広く活躍する鬼才が、読響に初登場。自作のクラリネット協奏曲〈エコー=フラグメンテ〉を日本初演する。1973年ドイツ・ミュンヘン生まれ。11歳から作曲の勉強を始め、ヘンツェやリームらに師事するかたわら、ミュンヘン音楽大学とジュリアード音楽院でクラリネットを学んだ。代表作の歌劇〈バビロン〉をはじめ多彩な作品群で知られるほか、ソリストとしてこれまでにドホナーニ、カンブルラン、エッセンバッハ、ナガノらの指揮者と共演。室内楽奏者、指揮者としても高い評価を得ている。

◇ 1月13日 定期演奏会



©Felix Broede

ヴァイオリン イザベル・ファウスト

Violin Isabelle Faust

深い洞察に基づく解釈と情熱的な演奏で聴き手を魅了するヴァイオリンの名手が、カンブルランの指揮で読響デビューを果たす。ドイツ・エスリンゲン生まれ。5歳からヴァイオリンを始める。1993年にパガニーニ国際ヴァイオリンコンクールで優勝して注目された。これまでにベルリン・フィル、ボストン響、パリ管などの一流オーケストラ、指揮者ではアバド、ブリュッヘン、ハイティンク、ハーディングらと共演。録音もハルモニア・ムンディから多数出ている。使用楽器は、ストラディヴァリウス“スリーピング・ビューティ”(1704年製)。

◇ 1月19日 名曲シリーズ
◇ 1月20日 バルテノン名曲シリーズ
◇ 1月21日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ

1.6 [土]

1.7 [日]

道下京子 (みちした きょうこ)・音楽評論家

J. シュトラウスⅡ世 喜歌劇〈こうもり〉 序曲

シュトラウス家は、オーストリアでも有数の音楽家一族である。ヨハン・シュトラウスⅠ世が一族の始まりで、その息子の「ワルツ王」と呼ばれるヨハン・シュトラウスⅡ世(1825～99)やヨーゼフ、エドゥアルドも作曲家としての地位を築き上げた。ヨハンは父と同じく楽団をもち、双方の楽団は競い合うようになる。父が他界したのち、彼は自身の楽団を拡充して各国へ遠征し、国際的な評価を得た。

指揮者を辞める1870年頃から、彼はオペレッタ(喜歌劇)の創作を本格的に手掛けるようになる。喜歌劇〈こうもり〉は、彼のオペレッタの代表作。この作品の物語の舞台は、大晦日おおみそかのウィーンの夜会。本日は、このオペレッタから序曲が演奏される。年末年始のドイツ語圏の歌劇場では、このオペレッタが定番となっている。

J. シュトラウスⅡ世 ワルツ〈南国のバラ〉 作品388

ヨハン・シュトラウスⅡ世は、父が確立したウィнна・ワルツのスタイルを踏襲しつつ、それを発展させ、自らの楽団での演奏を目的に膨大な数のワルツやポルカを書き上げた。それらの作品は時事的な話題を織り込んだり、自作のオペレッタなどの作品のメロディを取り入れたりしたものが多く、人々に親しまれた。

ワルツ〈南国のバラ〉は、「喜歌劇〈王女のレースのハンカチ〉のモチーフによる」というタイトルをもつ。序奏と典雅な四つのワルツからなり、それぞれのワルツのテーマはオペレッタから用いられている。

ラヴェル 亡き王女のための パヴァーヌ

フランス近代の作曲家、モーリス・

ラヴェル(1875～1937)はスペイン国境に近いシブールに生まれ、生後間もなくパリへ移住。パリ音楽院ではフォーレらに学んでおり、ラヴェルの初期のピアノ作品にはフォーレやシャブリエらの影響がみられる。ルーヴル美術館が所蔵するスペインの画家ベラスケスの描いた絵画に、ラヴェルは深い感銘を受けた。その王女マルゲリータの肖像画にインスピレーションを得て、1899年に作曲されたのが〈亡き王女のためのパヴァーヌ〉で、彼の初期のピアノ作品である。パヴァーヌはフランスの宮廷舞曲で、ゆったりと2拍子を刻む。音楽は古風な様式を織り交ぜ、和声を絶妙に用いて陰影豊かな音色を生み出してゆく。

ヴィエニャフスキ 華麗なるポロネーズ 第1番 作品4

ポーランド生まれのヘンリク・ヴィエニャフスキ(1835～80)は、ヴァイオリンを学ぶために8歳でパリ音楽院に入学。その後、作曲を勉強すべく1849年に再びパリ音楽院の門をくぐる。彼は名ヴァイオリニストとして讃えられ、〈華麗なるポロネーズ第1番〉にも彼の卓越した演奏技巧が示されている。前奏の4小節では、ポーランドの宮廷舞曲ポロネーズのリズムが高らかに響きわたる。続いて独奏ヴァイオ

リンは、弾むようなリズムで主題をしながらに歌い上げてゆく。華やかなヴァルトゥオジティとともに、スラヴ情緒の漂う音楽。

デュカス 交響詩 〈魔法使いの弟子〉

ポール・デュカス(1865～1935)はユダヤ系フランス人作曲家で、パリ音楽院ではピアノや作曲などを学ぶ。その頃の音楽院にはドビュッシーやサンディらもいた。評論や編曲、校訂に活躍の場を広げた時期もあり、交響詩〈魔法使いの弟子〉はその頃の創作である。納得のいかない自作をことごとく破棄したデュカス。この作品は、彼の残された数少ない曲のなかでも最高傑作として知られる。

交響詩〈魔法使いの弟子〉は、文豪ゲーテの同名のバラードをもとに作曲された。音楽は序奏とスケルツォからなる。水を象徴するような響きのなか、クラリネットやハープなどがほうきを暗示するモチーフを静かに奏でる。音楽は盛り上がり、ティンパニの一打ののちにスケルツォに入り、ファゴットが水を運ぶほうきのテーマを奏でる。これらのテーマやモチーフは、物語の登場人物を暗示している。音楽は、卓越したオーケストレーションによって鮮やかに展開される。

オッフェンバック

喜歌劇〈天国と地獄〉 序曲

ジャック・オッフェンバック (1819～80) はドイツ・ケルンの出身。チェロを学ぶためにパリへ赴き、そのままパリを拠点に活動した。オペレッタの作曲家として有名な彼の作品のなかで、〈天国と地獄〉(全2幕)は広く知られている。ギリシャ神話のオルフェウスとエウリディーチェを題材としたパロディーで、それまでのオペラではオペラ・セリア(正歌劇)として用いられたこの物語を、オッフェンバックは天国の神や地獄の神の登場する喜劇に仕上げている。

本日演奏されるのは序曲である。この序曲は、オッフェンバックの原曲には書かれておらず、1860年にウィーンで演奏されるのを機に、カール・ビンダー (1816～60) によって付け加えられた。序曲は三つの部分からなり、にぎやかに始まる第1部、第2部はワルツのような典雅さを湛えた独奏ヴァイオリンの調べが印象的。有名な“カンカン”は第3部に演奏される。

サン＝サーンス

歌劇〈サムソンとデリラ〉 から“バッカナール”

フランス国民音楽協会を設立するなど、カミーユ・サン＝サーンス (1835～

1921) は、フランス独自の器楽作品の確立に尽力し、リストとも深い交流を結んだ。彼は幅広いジャンルの創作を手掛け、交響詩をフランスにもたらしただけではなく、オペラも10曲以上書き上げた。なかでも歌劇〈サムソンとデリラ〉は最も知られており、リストが宮廷楽長を務めるワイマールで初演された。

このオペラは、旧約聖書のヘブライ人とペリシテ人の争いを題材としている。怪力の英雄サムソンはペリシテ人の女性デリラに籠絡され、自身の弱点が長い髪であることをしゃべってしまう。そうすると、ペリシテ人の兵士に捕らえられ、髪を切られたサムソンは怪力を失う。サムソンは最後に神に祈ると怪力が戻り、神殿を打ち壊すというストーリー。本日演奏される“バッカナール”は、サムソンを捕らえたペリシテ人が酒宴を開くシーンで演奏されるバレエ音楽。

ワックスマン

カルメン幻想曲

フランツ・ワックスマン (1906～67) はドイツ (現在のポーランド南部) 出身。ベルリンへ赴いた彼は、映画音楽の世界を知る。第2次世界大戦が勃発すると、ユダヤ人のワックスマンは渡米。映画音楽を広く手掛け、ヒットcock映画の音楽にもたずさわった。

華やかな演奏技巧に満ちた〈カルメン幻想曲〉は、名ヴァイオリニスト、

ヤッシャ・ハイフェッツのための作品で、演奏会でよく取り上げられる。“ハバネラ”や“アラゴネーズ”など、ビゼーの歌劇〈カルメン〉に登場するメロディが自由に展開されている。

J. シュトラウスⅡ世

トリッチ・トラッチ・ ポルカ 作品214

〈トリッチ・トラッチ・ポルカ〉は1858年の作品。当時のヨハン・シュトラウスⅡ世はロシアの鉄道会社と契約し、ロシアでも音楽活動を行うようになり、ウィーンよりも破格の報酬を得ていた。ポルカは、ボヘミア地方の2拍子系の舞曲。彼は100曲にもおよぶポルカを書き上げている。その作品は、日常の出来事を表現したものが多いが、このポルカもそうした作品のひとつであろう。「トリッチ・トラッチ」は、ドイツ語で「おしゃべり」の意味。人々の陽気なおしゃべりを、トライアングルや装飾音符などを用いて表現している。

J. シュトラウスⅡ世

ポルカ〈雷鳴と電光〉 作品324

〈雷鳴と電光〉は、ヨハン・シュトラウスⅡ世のポルカのなかでもひとときわ人気の高い曲。ポルカ・シュネルと呼ばれ、軽快な楽想が特徴。このポルカは、軽やかなリズムが刻まれるなか、

雷鳴と稲妻を模写したかのような太鼓とシンバルの音が多彩に表れ、時に嵐のように激しく絡み合う場面もある。暗くおどろおどろしい雷のイメージは影を潜め、音楽は明るくにぎわいを感じさせる。ちなみに、この曲の本来のタイトルは「流れ星」だったという。彼自身の喜歌劇〈こうもり〉の第2幕で、この音楽が用いられることもある。

J. シュトラウスⅡ世

ワルツ〈美しく青き ドナウ〉 作品314

〈美しく青きドナウ〉は、オーストリアの第2の国歌と呼ばれるほど、人々から親しまれているワルツ。ウィーン・フィルのニューイヤー・コンサートでは、アンコールとして演奏される。

1866年、オーストリアはプロイセンとの戦争に敗北。ウィーンに漂う敗戦による陰鬱な空気を払拭すべく、ウィーン男声合唱協会はシュトラウスⅡ世に作曲を委嘱し、1867年に男声四部合唱のための作品が完成した。もともとのタイトルは「合唱とオーケストラのためのワルツ」というものであった。現在よく演奏されるオーケストラ版は、その男声合唱版の初演後、ひと月のうちに編み直された。全体は、序奏と五つのワルツからなり、冒頭のホルンが、ドナウ川の流れを彷彿させるように朗々と鳴り響く。

ブリテン

歌劇〈ピーター・グライムズ〉から
“4つの海の間奏曲”

作曲：1944～45年／初演：1945年6月13日、チェルトナム／演奏時間：約16分

ベンジャミン・ブリテン (1913～1976) の歌劇〈ピーター・グライムズ〉は、1945年6月7日にロンドンのサドラーズ・ウェルズ劇場で初演され、大成功を収めた。この成功によって、ブリテンは一夜にして英国を代表する作曲家としての地位を確立した。

オペラは、18世紀後半の英国の詩人ジョージ・クラブの詩集『町』に収められた長編詩「ピーター・グライムズ」をもとに、モンタギュー・スレイターの台本に作曲された。北海沿いの漁村が舞台で、漁師ピーター・グライムズは粗野な性格ゆえに孤立し、周囲との軋あつれが悲劇を生む。オペラでは海とともに暮らす人々の生活が、潮の香りがする海辺の風景と結びつけて描かれる。ブリテンの故郷、英国東部のサフォーク州のローストフトも、後に移り住むオールドバラも、北海に面した町。海は、作曲家の愛する情景でもあった。

“4つの海の間奏曲”は、オペラの6曲の間奏曲 (各幕前と各場の間に置かれた) から選ばれ、それぞれにタイトルを付けて演奏会用に編まれた。間奏曲は、管弦楽のみだが、言葉では表現されないドラマの深部を突いている。

第1曲「夜明け」 オペラのプロローグと第1幕の間の間奏曲。夜明けの海にカモメが舞う、静かな日常が描かれる。

第2曲「日曜の朝」 第2幕前の間奏曲。明るい陽の光が降り注ぎ、海も輝く。ホルン4本と特徴的なリズムの木管楽器の交替で始まり、鐘の音が遠くに響く。

第3曲「月の光」 第3幕前の間奏曲は、月夜に照らされた穏やかな夏の海的情景。低弦がゆるやかな波の様子を、フルートとハーブが月明かりを描く。

第4曲「嵐」 第1幕第2場前の間奏曲は、荒れ狂う海の様子。嵐の主題は、オペラの中で繰り返され、窮地に追い込まれたピーターの心を映し出す。

楽器編成／フルート2 (ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2 (エスクラリネット持替)、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (鐘、シロフォン、小太鼓、タンブリン、シンバル、銅鑼、大太鼓)、ハーブ、弦五部

ヴィトマン

クラリネット協奏曲〈エコー＝フラグメンテ〉 (日本初演)

作曲：2006年／初演：2006年6月25日、フライブルク／演奏時間：約20分

ドイツの現代作曲家で、クラリネット奏者かつ指揮者のイェルク・ヴィトマン (1973～) は、いまヨーロッパで最も精力的な活動を展開している音楽家のひとりである。ミュンヘン音楽大学とニューヨークのジュリアード音楽院でクラリネットを学び、ソリストおよび室内楽奏者として世界的に活躍する一方で、作曲をヘンツェ、ゲッペルス、リームらに師事し、2000年代前半から作曲家としても頭角を現してきた。初期の弦楽四重奏曲シリーズ (5曲で完結) 以降は、歌劇や管弦楽作品で注目を集め、これまでにザルツブルク音楽祭 (2004年) やルツェルン音楽祭 (2009年) 等のアーティスト・イン・レジデンスに選ばれたほか、ヨーロッパ各地のオーケストラで彼の作品が特集されている。指揮者としても、現在、アイルランド室内管弦楽団の首席指揮者を務める。

ヴィトマンの作品は、独自のアプローチによる多彩な響きの組み合わせが興味深い。ブーレーズ指揮のウィーン・フィルがザルツブルク音楽祭で初演した〈アルモニカ〉 (2007年) では、独奏楽器がグラスハーモニカとアコーディ

オンという従来の発想にはない組み合わせの協奏曲で色彩豊かな音響が作られた。本日のクラリネット協奏曲〈エコー＝フラグメンテ〉では、モダン (443Hz) とバロック (430Hz)、それぞれピッチ (音高) の異なる二群のオーケストラが響きの差異を生み、独奏クラリネットがそれらに絡む。2006年にバーデン・バーデン & フライブルク SWR 響の委嘱で作曲され、作曲者自身の独奏、同楽団とフライブルク・バロック・オーケストラ、そして当時、同楽団の首席指揮者だったカンブランによって初演された。

ゆるやかな導入部では、クラリネット独奏の息の長いトリルに続き、モダン群ではハーブが、バロック群ではバンジョーのグリッサンドが1小節ずれて現れ、クラリネットのトリルはバロック・オーボエに引き継がれる。そして極端な強弱の変化や速度の転換を伴いながら、クラリネット独奏が二つのオーケストラの間を自由に行き来する。ほとんど休みなく特殊奏法を含む超絶技巧を披露し、最後はその余韻を静かに味わう。

楽器編成／【オーケストラ1】クラリネット2、バスクラリネット、コントラバスクラリネット、ティンパニ、打楽器 (グロッケンシュピール、銅鑼、大太鼓)、ハーブ、チェレスタ、アコーディオン、弦五部 【オーケストラ2】バロックオーボエ (リコーダー持替)、ナチュラルホルン4、打楽器 (シンバル)、ギター (バンジョー、バンドウリア持替)、弦五部 独奏クラリネット

ブルックナー 交響曲 第6番 イ長調 作品106

作曲：1879～1881年／初演：1883年2月11日、ウィーン（第2、第3楽章のみ）、
1899年2月26日、ウィーン（全曲短縮版）、1901年3月14日、シュトゥットガルト（全曲）／演奏時間：約54分

アントン・ブルックナー（1824～96）の交響曲は、完成後に作曲者自身が修正や書き直しをしたり、弟子たちが改訂の手を入れるなどして、複数の稿や版が存在することがよく知られている。交響曲第6番は、そのなかでは例外的な作品で、自身や他人によって変更が加えられることはなかった。

ブルックナーは、交響曲第2番以来、ほとんど途切れることなく交響曲を書き続け、1870年代後半は主にその改訂に取り組んだ。そして1879年7月に弦楽五重奏曲へ長調と無伴奏合唱曲〈正しい者の口は知恵を借り〉を完成させると、再び交響曲の創作に戻ってきた。第6番は、9月24日に着手され、それから2年の歳月をかけてウィーンにおいて作曲が進められた。

ブルックナーの日常に大きな波が立つことはあまりない。淡々とした日々が続くなか、1880年の夏の休暇は、彼にとっていつもとは違う、特別なものだったかもしれない。例年はザンクト・フローリアン近郊で夏の休暇を過ごすのが、この年は、ヨーロッパ最高のモンブランを見てみたいという思いから、スイス旅行に出かけた。音楽以外にあまり関心を向けないブルックナ

ーも、その壮大な景色と自然の雄大さに大いに魅了された。この旅行ではスイスの前に南ドイツのオーバーアマーガウに立ち寄り、受難劇を見ている。そこでは出演者の若い女性に恋心を抱き、ウィーンに戻ってからも彼女に手紙を送るほど惚れ込んでいた。

これらの経験が交響曲の創作に与えた影響を裏づけるものはないが、ブルックナーが自ら「対位法の傑作」とした第5番の厳格さとは異なり、第6番はロマンティックで親しみやすさをもっていることと無関係ではないだろう。作曲は順調に進み、「内面から迸り出てきた」（ハルトマン）かのように交響曲は完成し、その後も作曲者が手を加えることはなかった。ここまで順調だったが、なかなか初演までこぎつけず、ブルックナーの生前に全曲が演奏されることはなかった。

まず中間の二つの楽章が、交響曲完成の2年後、1883年にウィーンのムジークフェラインザールで、ヴィルヘルム・ヤーン指揮のウィーン・フィルによって演奏された。概ね評判は良かったようだが、再演されることはなかった。全曲の初演は、作曲者死後3年目の1899年に、グスタフ・マーラー指揮

のウィーン・フィルによって行われた。マーラーは、若き日にはウィーン大学のブルックナーの講義に登録するなど、青年時代から作曲家を敬愛し続けたが、この初演では独自の判断で、全体の短縮や楽器の扱いの変更など大胆に手が入れた。短縮なしの全曲初演は20世紀に入ってから、1901年にヴィルヘルム・ボーリヒ指揮のシュトゥットガルト・ホーフカペレ管によって行われた。

第1楽章 マエストーソ（イ長調、2/2拍子）ソナタ形式。いつもの弦楽器のトレモロによる神秘的な開始ではなく、ヴァイオリンの同音の特徴的なリズムの反復から、低弦にどっしりとした第1主題が現れ、管楽器との応答を繰り返し、壮麗な響きへと達する。静かになった後、第1フルートの橋渡しで、「とても遅く」と指示されたナイーヴな第2主題がヴァイオリンに現れる。力強い第3主題はトランペットのファンファーレに勢いづけられる。やがて落ち着き、提示部の最後は再びフルートのみの響きが残る。主に第1主題が取り扱われる展開部を経て、強力な第1主題で始まる再現部は、長大なコーダで結ばれる。

第2楽章 アダージョ（きわめて厳かに、ヘ長調、4/4拍子）ソナタ形式。「悲

痛な嘆きと魂のさすらい」を感じさせる美しい緩徐楽章。弦楽器の重たい足取りの第1主題には、オーボエの哀しげな歌が絡む。ホルンの橋渡しを経て、穏やかな第2主題がたっぷり歌われる。葬送行進曲風に始まる第3主題は深遠で、自作のミサ曲の楽句の引用が指摘されるように宗教的な雰囲気を漂わせる。

第3楽章 スケルツォ（速くなく、イ短調、3/4拍子）3部形式。低弦のppから全楽器のffまでダイナミックに進むスケルツォ主題が繰り返される。トリオ（ゆっくりと、ハ長調、2/2拍子）では、弦楽器のピッツィカートがこの部分のみ3本となるホルンの牧歌的な響きを導く。

第4楽章 フィナーレ（動きをもって、しかし速すぎず、イ短調、2/2拍子）ソナタ形式。ヴィオラのトレモロと低弦のピッツィカートを伴奏にした、ヴァイオリンの哀愁を帯びた旋律による序奏に続いて、輝かしい第1主題が現れ、金管楽器が主題を確保する。ホルンの持続から、弦楽器が対位的に絡まる穏やかな第2主題が始まり、大きく高まって、歯切れの良い第3主題が現れる。展開部を経て、充実した響きの再現部となり、コーダの最後で第1楽章第1主題がトロンボーンで奏される。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

1.19 [金]

1.20 [土]

1.21 [日]

柴田克彦 (しばた かつひこ)・音楽ライター

ブラームス ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品77

作曲：1878年／初演：1879年1月1日、ライプツィヒ／演奏時間：約38分

ドイツ・ロマン派の大家ヨハネス・ブラームス (1833～97) が残した唯一のヴァイオリン協奏曲。ベートーヴェン、メンデルスゾーン、チャイコフスキーの各曲と並ぶ当ジャンルの代表作である。

1877年、風光明媚なオーストリアの保養地ペルチャッハで夏を過ごし、交響曲第2番を生み出したブラームスは、翌1878年の夏も同地に滞在して本作に着手。盟友の大ヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒムの助言を得ながら年末に完成させ、1879年1月、ヨアヒムの独奏、ブラームスの指揮により初演された。

本作は、当時流行した名人芸誇示型の協奏曲ではなく、独奏とオーケストラが競奏と協調を重ねて作り上げる交響曲風の性格を有している。それでいて独奏は、重音奏法をはじめとする高度な技巧を要し、見せ場も多い。また、夏前に行ったイタリア旅行の影響とい

われる明るさも特徴をなしている。

なお、ブラームスが記していない第1楽章のカデンツァは、多数の名奏者が創作している。通常用いられるのはヨアヒム作だが、本日は、イタリア出身の作曲家フェルッチョ・ブゾーニ (1866～1924) の作が演奏される。ファウストがCDでも弾いているこのカデンツァは、ティンパニを伴いながら進行し、最後はオーケストラが合流して本編へ戻る形になっている。

第1楽章 アレグロ・ノン・トロppo。二つの牧歌風の主題を軸に多彩な変化を遂げていく、長大な楽章。

第2楽章 アダージョ。オーボエが奏する息の長い旋律をヴァイオリンが受け継ぎ、叙情味溢れる音楽を展開。切々とした中間部が挟まれる。

第3楽章 アレグロ・ジョコソ、マ・ノン・トロppo・ヴィヴァーチェ。ハンガリー舞曲風の主題を軸にした、活気漲るフィナーレ。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

J.S. バッハ (マーラー編) 管弦楽組曲から第2, 3, 4曲

作曲：不明 (原曲)、1909年 (編曲版)／初演：不明 (原曲)、1909年11月10日、ニューヨーク (編曲版)／演奏時間：約12分

ヨハン・セバスティアン・バッハ (1685～1750) の〈管弦楽組曲〉全4曲は、〈ブランデンブルク協奏曲〉全6曲と共に、ドイツ・バロック音楽の管弦楽作品を代表する存在。作曲時期は不明だが、少なくともバッハがライプツィヒで1729年から率いた演奏団体「コレギウム・ムジクム」の公演で披露されたとみられている。

フランスで生まれたバロック時代の「組曲」は、序曲に複数の舞曲が続く形が基本。ただしバッハの管弦楽組曲は、舞曲以外の音楽を含んでおり、各曲ごとに編成も異なる多彩な内容となっている。

今回演奏されるのは、大交響曲でおなじみのグスタフ・マーラー (1860～1911) が、4曲の中でもポピュラーな第2番と第3番から楽曲を選んで再構成したダイジェスト編曲版。アメリカで活動した晩年の1909年に作成された。

いわゆる「マーラー編」には、シューマンの交響曲など実質的な“改作”もあるが、本作は、シューベルトの〈死と乙女〉、ベートーヴェンの第11番の両弦楽四重奏曲の弦楽合奏版と同様、純粋な“編曲”に近いといえる。それ

は、基本的な編成を変えず、若干の楽器法の変更、アクセントなどの追加、通奏低音のリアリゼーション (低音のみ、または低音+音程を示す数字のみ記されている音を、和音として記譜すること) のみ行われているからである。今の耳には若干ロマンティックに聞こえるものの、近代の作曲家や指揮者によるバッハ作品の編曲に比べると原曲のテイストを残しており、カンブルランが今回取り上げる理由もそこにある。このコンサートでは、全4曲中、オルガンを補強した第1曲＝第2番の序曲以外の3曲を演奏する。

第2曲“ロンドとバディネリ” フルートがフィーチャーされた第2番の第2曲と第7曲。哀感を帯びたガヴォットによるロンド部分から、急速なバディネリ (「冗談」を意味する) を経て、ロンドに戻る。

第3曲“アリア” 第3番の第2曲。〈G線上のアリア〉として有名な美しいナンバー。現在も採用されることが多い低弦のピッツィカートが特徴的だ。

第4曲“ガヴォット” 第3番の第3曲。トランペット (原曲通り) が参加。生き生きとしたガヴォットが二つ続く。

楽器編成／フルート、オーボエ2、トランペット3、ティンパニ、チェンバロ、弦五部

ベートーヴェン

交響曲 第5番 ハ短調 作品67 〈運命〉

作曲：1807～08年／初演：1808年12月22日、ウィーン／演奏時間：約31分

ウィーン古典派の巨匠ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）を代表するのみならず、インパクトのある出だしによってクラシック音楽の象徴ともなった劇的な交響曲。主として1807年に作曲されたが、途中から対照的な曲調の第6番〈田園〉と並行して進められ、1808年3月に完成。同年12月アン・デア・ウィーン劇場における自主演奏会で2曲同時に初演された。しかしこの公演は、寒い中で全8曲が4時間にわたって披露され、別の曲での演奏の不備もあって不成功に終わったと伝えられている。

着想自体は1804年頃に開始されており、曲を特徴づける「ジャジャジャ・ジャン」の4音＝通称「運命動機」を緊密に構築するまでに、かなりの推敲が重ねられた。また〈運命〉のタイトルは、「『運命はこのようにして扉を叩く』とベートーヴェンが語った」という弟子シンドラーが伝える逸話に由来している。だが彼の伝える話は捏造が多く、これも信憑性は低いとみられている。

ベートーヴェンは、9曲の交響曲ごとに新機軸を打ち出したが、本作はそ

れが特に顕著。旋律ではなく4音の動機を軸に据えた発想、運命動機が全楽章に登場して曲を統一する有機的な構成、闘争から勝利に至る「暗から明へ」の明確な構図、第3楽章の最後をクレッシェンドしたまま第4楽章に入る斬新な手法、交響曲史上初となるピッコロ、コントラファゴット、トロンボーンの使用（すべて第4楽章のみ）など、独創性を満載した作品だ。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ。運命動機の連続で緻密に構築される緊迫した楽章。弦で柔和に出される第2主題の背後にも運命動機が鳴っている。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート。二つの主題を用いた美しくも雄大な変奏曲。安らぎと緊張感が同居している。

第3楽章 アレグロ。運命動機を中心とした主部と、荒々しい中間部からなるスケルツォ楽章。不気味な経過部分の最後が盛り上がったところで第4楽章へ入る。

第4楽章 アレグロ。全合奏に始まる輝かしい凱歌。途中で第3楽章の運命動機が回想された後、著しい高揚を遂げる。ピッコロの使用法にも要注目。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部